

曹植「白馬篇」考——福山

曹植「白馬篇」考—「游侠児」の誕生—

福 山 泰 男

序

後漢末三国時代の詩人曹植の「白馬篇」は、「声を沙漠の垂に揚げる」「游侠児」を描いた楽府作品である。「白馬篇」は、「游侠児」の勇壮ぶりを詠うのみならず、「身を鋒刃の端に棄つれば、性命安んぞ懐うべけん……軀を捐てて国難に赴けば、死を視ること忽として帰するが如し」という悲壮な決意を述べて詩を締めくくっている。「游侠児」が「国難」に「軀を捐てる」と詠む「白馬篇」の詩的世界はどのようにもたらされたのか。

「游侠児」は「少年」という言葉を用いないが、游侠の少年を指している*1。小論では、「白馬篇」の游侠少年が踏まえる歴史的背景を探り、その上に創造された曹植の「游侠児」像を考えてみたい。

—

まず、「白馬篇」*2の全体を眺めてみよう。

白馬飾金羈	白馬金羈を飾り
連翩西北馳	連翩として西北に馳す
借問誰家子	借問す誰が家の子ぞ
幽并游侠児	幽并の游侠児
少小去郷邑	少小にして郷邑を去り
揚声沙漠垂	声を沙漠の垂に揚ぐ
宿昔秉良弓	宿昔良弓を乗り
楛矢何参差	楛矢何ぞ参差たる
控絃破左的	絃を控えて左的を破り
右発摧月支	右に発しては月支を摧く

*1 曹植の詩における游侠少年としての「少年」の文学的意義については、拙稿「曹植の『少年』」（『山形大学紀要〈人文科学編〉』第16巻第2号，2007）で考察を試みた。曹植が描く游侠少年の詩的形象を探る点において、本稿はその続編に位置づけられる。

*2 『文選』（芸文印書館、1979）巻27，22葉右・左。

仰手接飛猱	手を仰ぎて飛猱に接し
俯身散馬蹄	身を俯して馬蹄を散らす
狡捷過猴猿	狡捷猴猿に過ぎ
勇剽若豹螭	勇剽豹螭の若し
辺城多警急	辺城警急多く
胡虜數遷移	胡虜數しば遷移す
羽檄從北來	羽檄は北從り來たり
厲馬登高堤	馬を厲まして高堤に登る
長驅蹈匈奴	長驅して匈奴を踏み
左顧凌鮮卑	左に顧みて鮮卑を凌ぐ
棄身鋒刃端	身を鋒刃の端に棄つれば
性命安可懷	性命安んぞ懷うべけん
父母且不顧	父母すら且つ顧みず
何言子与妻	何ぞ子と妻とを言わん
名編壯士籍	名を壯士の籍に編せらるれば
不得中顧私	中に私を顧みるを得ず
捐軀赴国難	軀を捐てて国難に赴けば
視死忽如帰	死を視ること忽として歸するが如し

黄金に飾られた白馬が、西北に向かい飛ぶように疾走する。3句目の「借問す」という語りの手法は、白馬を疾駆させる者が「游侠児」であることを次第にクローズアップしていく。5・6句目で「少小にして郷邑を去り、声を沙漠の垂に揚ぐ」と述べられる「游侠児」は、年若い頃に故郷を離れ、北方の沙漠に活躍の場を得たと言う。後述するように、この記述には、「少年」＝游侠の若者が、豪侠等の集団・勢力に糾合され、あるいは集結していくという『史記』『漢書』『後漢書』等に記載される歴史的背景がある。

首句「白馬金羈を飾り」は、「青絲は馬の尾に繋ぎ、黄金は馬の頭^{つな}に絡ぐ（青絲繫馬尾，黄金絡馬頭）」*3 という「陌上桑」の句と類似の表現である。ほめ歌に近い裝飾の形容は漢樂府の特質であるが*4、7～14句目の「游侠児」の武芸をたたえる部分も、樂府の頌歌的伝統をふまえた表現であろう。このような頌歌的表現を含む詩に、曹植の「名都篇」*5がある。

……

宝劍直千金	宝劍直千金
被服光且鮮	被服 ^{かがや} 光かしく且つ鮮やか

*3 『樂府詩集』（中華書局，1979）卷28，411頁。

*4 漢樂府「日出東南隅行」「相逢行」「長安有狹斜行」「隴西行」等の他、曹植「美女篇」「名都篇」も頌歌的作品である。

*5 『文選』卷27，22葉左～23葉右。

鬪雞東郊道	雞を鬪わす東郊の道
走馬長楸間	馬を走らす長楸の間
馳馳未能半	馳せ馳せて未だ半ばなる能わざるに
双兔過我前	双兔我が前を過ぎる
攬弓捷鳴鏑	弓を攬りて鳴鏑を捷み
長驅上南山	長く駆けては南山に上る
左挽因右発	左に挽きて因りて右に発し
一縦兩禽連	一たび縦てば兩禽に連なる
余巧未及展	余巧未だ展るに及ばざれば
仰手接飛鳶	手を仰ぎて飛ぶ鳶を接す
觀者咸称善	觀る者咸な善し称し
衆工帰我妍	衆工我に妍を帰す

……

「名都篇」は都会の游侠少年を描いた楽府詩であるが、上に挙げた部分は、少年の出で立ちの鮮やかさや弓の腕前を褒め称える点において「白馬篇」の前半部分を彷彿させる。「白馬篇」のちょうど前半にあたる14句目までは、游侠少年の活動舞台を異にする以外、「名都篇」とほぼ同様の題材と見ることができよう^{*6}。両篇はまた、ともに南朝宋代に楽府題として確立し、後代に継承される「少年行」の原型となる作品である^{*7}。

しかし「白馬篇」は、祝頌的な前半部と異なり、15・6句目の「辺城警急多く、胡虜数しば遷移す」と詠む後半部分は、辺境の征戦に参加していく「游侠児」の必死の覚悟を述べている。胡族の侵入を防ぐ兵を招集する「羽檄」に応じ、「馬を厲まして高堤に登る」「游侠児」は、19・20句目で「長驅して匈奴を踏み、左に顧みて鮮卑を凌がん」と語っている。この部分は、縦横無尽に匈奴や鮮卑を討伐したいという「游侠児」の決意であろう。このような戦に備える決心が、21～28句目「身を鋒刃の端に棄つれば、性命安んぞ懐うべけん、父母すら且つ顧みず、何ぞ子と妻とを言わん、名を壯士の籍に編せらるれば、中に私を顧みるを得ず、軀を捐てて国難に赴けば、死を視ること忽として帰するが如し」と詩の最終部分まで述べ連ねられる。

「宿昔良弓を乗り」と述べる前半は、弓遊びに腕を振るような「游侠児」のこれまでの生活

*6 『楽府詩集』巻63注引「歌録」は「名都、美女、白馬、並齊瑟行也」と記す。911頁。

*7 岡村貞雄『古楽府の起源と継承』（白帝社、2000）第3章「少年行」は、游侠少年を詠む一連の作品系列に関し、文学史的に論じている。岡村は、楽府「少年行」が、劉宋の鮑照「少年行」等の楽府題の詩をはじめとする前期「少年行」と、李白「少年行」や李賀「少年楽」等の盛唐から晩唐にかけて詠われる後期「少年行」に分けられると説く。岡村は、前後期を通じて、游侠少年を描くことでテーマは一貫するが、前期「少年行」は、北方・辺域で活躍する勇壮な少年を、後期「少年行」は、市中の歓楽地を粹な格好で遊行する少年を描くことに違いがあると指摘する。

岡村貞雄は、游侠少年を描く後代の楽府「少年行」の原型として、曹植の「白馬篇」を取り上げている。しかし、岡村の言う特に後期の「少年行」の源流には「名都篇」を置くべきである。その点で、岡村が「名都篇」に言及しないのは不十分であろう。

を描き、後半は征戦に参集する今後の決意を披瀝する。このように、「白馬篇」は前後半の構成が対照的である。「白馬篇」の前半は、「名都篇」と同じように游侠少年の武芸に遊ぶ姿が詠まれ、後半部分の游侠少年は、国家の難に身を挺する憂国者として描かれる。言い換えれば、「白馬篇」の游侠少年は、武技に遊ぶ者という私的・遊興的側面と、後半部が述べるような「国難」に殉じる憂国者の性格の両面を具有している。「白馬篇」は前後半の二段に分けて、このような游侠少年の両義的性質を述べていると言えよう*8。

曹植のテキストにおける「少年」が、游侠少年を含意しかつ両義性をもつ詩語であることは別稿で触れた*9。游侠としての「少年」について言えば、『韓非子』五蠹篇や『漢書』游侠列伝では、游侠を、国家秩序を乱す者として非難する。他方、増淵龍夫は、『史記』游侠列伝に書かれる游侠を、民間秩序の維持者として評価し、游侠の倫理・行動が、後漢末にいたるまでなお、個人と個人を結ぶ規範として働いていた点に注目した。増淵は、内部においては秩序維持者である一方、外の世界では秩序破壊者となる游侠の両側面を指摘している*10。したがって、游侠に連なる游侠少年も、同様に秩序の維持者であり破壊者であるという両義性を帯びていると言えよう。「少年」とは、言い換えれば、友情や義侠を発揮する一方、無軌道や遊興に明け暮れるという正負両面の価値を備える存在であった。

ただ、いずれにせよ漢代にいたる游侠は、国家権力にとり秩序破壊者として弾圧の対象ともなった。游侠は、国家や社会秩序を超越し、個人の自立に立脚する存在であった*11。それに対し、逆に父母や妻子を顧みず「国難」に殉じようとする「白馬篇」の游侠少年には、曹植の創意が見られよう。その背景をもう少し窺ってみたい。

二

「白馬篇」の「羽檄北徙り来たり」という招集の知らせに、「游侠児」が応じるという詩句について考えてみたい。このことに関連し、想起される史料を取り上げてみよう。『史記』『漢書』『後漢書』『三国志』には、「少年」が、勢力集団の成員や軍隊の戦力として吸収されていくという記述が頻見する。正史中の「少年」は指摘されているように、そのほとんどが游侠の少年を意

*8 「名都篇」について、『楽府詩集』巻63の解題は、「以て時人騎射の妙、游騎の楽にして憂国の心無きを刺るなり（以刺時人騎射之妙、游騎之楽、而無憂国之心也）。」（912頁）と述べる。他方、『楽府詩集』巻63所収の曹植「白馬篇」に対する郭茂倩の解題は、「言うところは、人当に功を立て事を立て力を尽くして国の為にすべく、私を念うべからざるなり（言人当立功立事尽力为国不可念私也）。」（914頁）と説いている。『楽府詩集』は、游侠少年を描く曹植の楽府両篇について両様の解釈を示しているが、この解釈自体が、曹植の描く游侠少年の両義性を示している。

*9 注1前掲書。

*10 増淵龍夫「漢代における民間秩序の構造と任侠の性格」（『中国古代の社会と国家』岩波書店、1996、初出『一橋論叢』26—5、1951、1959補）79～89・114頁。

*11 James Jo-yü Liu（劉若愚）『中国の侠』（上海三聯書店、1991、原文「THE CHINESE KNIGHT-ERRANT」〈1967〉の中国語訳版）は、游侠は個人の尊厳を強調し国家権威に反対する、また政府と法律を無視し無政府主義的態度を取るという性質をもつと説く。9・12頁。

味する*12。ここではさらに、「白馬篇」に見える「游侠兒」すなわち游侠の「少年」について、史書の用例からその歴史的動態を見てみよう。

後十年，陳涉等兵を起こし，良も亦た少年百餘人を聚む。(後十年，陳涉等起兵，良亦聚少年百餘人。)*13

陳涉，項梁の起つに，少年或いは越に謂いて曰く，「諸豪傑相立ちて秦に畔く。仲以て来たるべし。亦た之に效わん」と。彭越曰く，「兩龍方に闘わん，且く之を待て」と。居ること歳余，沢間の少年相聚まること百餘人，往きて彭越に従い曰く，「仲に長と為らんことを請う」と。越謝して曰く，「臣は諸君と与にするを願わず」と。少年強く請い，乃ち許す。(陳涉，項梁之起，少年或謂越曰，「諸豪傑相立畔秦。仲可以来。亦效之。」彭越曰，「兩龍方闘，且待之。」居歳餘，沢間少年相聚百餘人，往從彭越，曰，「請仲為長。」越謝曰，「臣不願与諸君。」少年彊請，乃許。)*14

陳勝起ちし時，商少年を聚め東西に人を略し，数千を得たり。(陳勝起時，商聚少年東西略人，得数千。)*15

是に於いて少年豪吏の蕭，曹，樊噲等の如き皆な為に沛の子弟を収め，三千人を得たり。(於是少年豪吏如蕭，曹，樊噲等皆為収沛子弟，得三千人。)*16

以上は，地方の豪侠集団に游侠の「少年」が集結し，あるいは糾合されていく記事である。その他、『漢書』張良伝・彭越傳・酈商伝には，上記、『史記』留侯世家・彭越伝・酈商伝と同一の記載が見える*17。一方，次のような記載は，多数の「少年」が国家の兵力としてかり出された史実を示している。

元鳳四年九月，客星は紫宮中の斗樞と極の間に在り。占いて曰く，「兵を為せ」と。其の五年六月，三輔の郡国の少年を發し北軍に詣らしむ。(元鳳四年九月，客星在紫宮中斗樞極間。占曰，「為兵。」其五年六月，發三輔郡国少年詣北軍。)*18

李広利を拜して貳師將軍と為し，属国六千騎，及郡国惡少年數万人を發し，以て往きて宛を伐つ。…益ます惡少年及び辺騎を發す。(拜李広利為貳師將軍，發属国六千騎，及郡国惡少年數万人，以往伐宛。…益發惡少年及辺騎。)*19

*12 増淵龍夫等。拙稿，注1前掲書は，さらに「惡少年」「輕薄少年」「惡子」という用例に注目し，「少年」が負の価値・惡のイメージを帯びることを述べた。

*13 『史記』(中華書局，1959)卷55，留侯世家，2036頁。

*14 『史記』卷90，彭越伝，2591頁

*15 『史記』卷95，酈商伝『史記』卷95，酈商伝，2660頁。

*16 『漢書』(中華書局，1962)卷1上，高帝紀，10頁。

*17 「居歳余，沢間少年相聚百余人，往從越，「請仲為長」，越謝不願也。少年強請，乃許。」(『漢書』卷34，彭越伝，1878頁。)[後十年，陳涉等起，良亦聚少年百余人。](『漢書』卷40，張良伝，2025頁。)[陳勝起，商聚少年得数千人。](『漢書』卷41，酈商伝，2074頁。)

*18 『漢書』卷26，天文志，1307頁。

*19 『史記』卷123，大宛列伝，3174・3176頁。

惡少年及び辺騎を發し、歳余にして敦煌の六万人を出だす。(發惡少年及辺騎、歳余而出敦煌六万人。)*²⁰

「少年」の性格を知る上で、上記の「悪少年」という言葉は注意を引く。「悪少年」について顔師古は、「悪少年とは行義無き者を謂う（悪少年謂無行義者）」と注している*²¹。李広利の外征に不品行の少年が徴集されたという記載は、「少年」の性格および動態を見る上で興味深い。豪侠に糾合される「少年」はまた「悪少年」とも記され、国家の戦役に徴発される者であった*²²。前章でやや触れたが、「少年」の両義性・多義性は、たとえ不品行の者であれ、一旦事あれば国家や勢力集団に集結する、その行動形態にも表れていると言えよう。

以上、『史記』『漢書』に見える「少年」は、およそその素行如何に関わらず、私的勢力や国家に糾合され、あるいは集結・結党するという性質・動態を有していた。このような史書の記述は枚挙にいとまがないが、『後漢書』『三国志』の記載を列举してみよう。

訓遂に其の中の少年勇者数百人を撫養し、以て義従と為す。(訓遂撫養其中少年勇者数百人、以為義従。)*²³

是に於いて剽軽劍客の徒過晏等十余人、皆来たりて応募す。陶其の先過を責め、要するに後の效を以てす。各おのをして厚くする所の少年を結ばしめ、数百人を得たり。皆兵を嚴にして命を待つ。(於是剽軽劍客之徒過晏等十余人、皆来応募。陶責其先過、要以後效、使各結所厚少年、得數百人、皆嚴兵待命。)*²⁴

郡吏の其の母を辱める者有り、球少年数十人と結び、吏を殺し、其家を滅す。(郡吏有辱其母者、球結少年数十人、殺吏、滅其家。)*²⁵

城中の少年、朱弟、張魚等數千人兵を起こして莽を攻む。(城中少年朱弟、張魚等數千人起兵攻莽。)*²⁶

張燕は、常山真定の人なり。本は褚を姓とす。黄巾起こり、燕少年を合聚して群盜と為し、山沢の間に在りて転た攻め、真定に還る。衆万余人。(張燕、常山真定人也、本姓褚。黄巾起、燕合聚少年為群盜、在山沢間転攻、還真定、衆万余人。)*²⁷

張繡は、武威祖厲の人、驃騎將軍濟の族子なり。…繡縣吏と為り、間かに伺いて勝を殺し、郡内之を義とす。遂に少年を招合して、邑中の豪傑と為る。(張繡、武威祖厲人、驃騎

*²⁰ 『漢書』卷61、李広利伝、2700頁。

*²¹ 「李広利、女弟李夫人有寵於上、産昌邑哀王。太初元年、以広利為武師將軍、發属国六千騎及郡国惡少年數万人以往」の条に係る顔師古注。(『漢書』卷61、李広利伝、2699頁。)

*²² 「少年」の徴発に関連して言えば、「少従」と称され、年少の者が外交使節に随行する記載も見られる『漢書』卷61、張騫傳の「漢使往既多、其小従率進孰於天子」に係る孟康注に、「少従、不如計也。或曰、少者、少年従行之微者也」、また顔師古注に、「漢時謂隨使而出外国者为少従、総言其少年而従使也」(2697・2698頁)とある。

*²³ 『後漢書』(中華書局、1965)卷16、子訓伝、610頁。

*²⁴ 『後漢書』卷57、劉陶伝、1848頁。

*²⁵ 『後漢書』卷77、酷吏列伝、陽球伝、2498頁。

*²⁶ 『後漢書』天文志、3219頁。

*²⁷ 『三国志』(中華書局、1982)魏書、卷8、張燕伝、261頁。

将軍濟族子也。…繡為縣吏，問伺殺勝，郡内義之。遂招合少年，為邑中豪傑。）^{*28}

曹仁字は子孝，太祖の従弟なり。少くして弓馬弋獵を好む。後豪傑並び起ち，仁も亦た陰かに少年と結びて，千余人を得たり。（曹仁字子孝，太祖従弟也。少好弓馬弋獵。後豪傑並び起，仁亦陰結少年，得千餘人。）^{*29}

許褚字は仲康，譙国譙の人なり。…勇力絶人たり。漢末，少年及び宗族數千家を聚め，共に壁を堅くして以て寇を禦ぐ。（許褚字仲康，譙国譙人也。…勇力絶人。漢末，聚少年及宗族數千家，共堅壁以禦寇。）^{*30}

雋表して堅を佐軍司馬に為さんことを請う，郷里の少年隨いて下邳に在る者皆従わんことを願う。（雋表請堅為佐軍司馬，郷里少年隨在下邳者皆願従。）³¹

肅，術に綱紀無く，与に事を立てるに足らずと見，乃ち老弱を攜え輕俠の少年百余人を將いて，南のかた居巢に到り瑜に就く。（肅見術無綱紀，不足与立事，乃攜老弱將輕俠少年百余人，南到居巢就瑜。）³²

吳書に曰く，肅は体貌魁奇，少くして壯節有り，奇計を為すことを好む。天下將に乱れんとし，乃ち擊劍騎射を学び，少年を招聚し，其衣食を給す，と。（吳書曰，肅体貌魁奇，少有壯節，好為奇計。天下將乱，乃学擊劍騎射，招聚少年，給其衣食。）³³

甘寧字は興霸，巴郡臨江の人なり。少くして氣力有り，游俠を好む。輕薄の少年を招合し，之が渠帥と為る。（甘寧字興霸，巴郡臨江人也。少有氣力，好游俠，招合輕薄少年，為之渠帥。）³⁴

以上例示したように，秦末漢三国時代を通じ，無数の「少年」たちが勢力集団に糾合・組織化され，あるいは自ら参入を志願している。「少年」は，時には豪俠勢力における強力な兵力・戦力ともなりえた。また，朝廷による征戦に徴発されることすらあった。さらに遊俠の「少年」は「悪少年」とも記され，「父母の教命を承げざる者（不承父母教命者）」³⁵であった。「白馬篇」に「父母すら且つ顧みず，何ぞ子と妻とを言わん」と述べる部分は，集団組織のために家族すら顧みない遊俠「少年」の性格と密接に関連しているであろう。

以上のような「少年」の歴史的動態が，文学作品における游侠少年の意味形成に強固な因襲として働くことは十分に想像できよう。曹植の「白馬篇」はそのような因襲を踏まえつつ，「游侠児」をさらに，私的勢力ではなく国家に進んで身を殉じるような者へと変容させているのである。しかも，「少年」は，『史記』『漢書』の記載だけでなく，同時代の曹仁・魯肅等が「少年」

*28 『三国志』魏書，卷8，張繡伝，262頁。

*29 『三国志』魏書，卷9，曹仁伝，274頁。

*30 『三国志』魏書，卷18，許褚伝，542頁。

*31 『三国志』呉書，卷46，孫堅伝，1094頁。

*32 『三国志』呉書，卷54，魯肅伝，1267頁。

*33 『三国志』呉書，卷54，魯肅伝注引，1267頁。

*34 『三国志』呉書，卷55，甘寧伝，1292頁。

*35 『漢書』卷90，酷吏伝，尹賞伝「輕薄少年惡子」に係る顔師古注。3674頁。

を糾合していたという『三国志』の史実に見られるように、曹植にとって身近な存在であったろう。曹植は、そのような游侠少年の実像をもとに新たな詩的形象を創造していったと考えられる。

三

「游侠児」の背景にある游侠「少年」の両義的性質や、その行動様態について、以上に、概観してきた。その上で「白馬篇」にもたらされた創意を、作者曹植の立場から理解してみたい。「白馬篇」の句「名を壮士の籍に編せらるれば、中に私を顧みるを得ず、軀を捐てて国難に赴けば、死を視ること忽として帰するが如し」を連想させる他の記述を見てみよう。曹植の政治的散文、「自ら試すを求むる表（求自試表）」は次のように述べる。

固より夫れ国を憂い家を忘れ、軀を捐てて難を濟くるは、忠臣の志なり。……史籍を覽る毎に、古の忠臣義士、一朝の命を出して、以て国家の難に徇じ、身は屠り裂かると雖も、而れども功名は景鍾に著われ、名績は竹帛に垂るるを觀て、未だ嘗て心を拊して歎息せずんばあらざるなり。（固夫憂国忘家捐軀濟難忠臣之志也。……世每覽史籍、觀古忠臣義士、出一朝之命、以徇国家之難、身雖屠裂、而功名著於景鍾、名績垂於竹帛、未嘗不拊心而歎息也。）³⁶

この上表文は、『三国志』魏書、曹植伝の太和2年（228）の条に「植常に自ら利器を抱きて施す所無きを憤怨し、上疏して自ら試すを求めて曰く…（植常自憤怨、抱利器而無所施、上疏求自試曰…）」³⁷として掲載されている。「求自試表」は、「古の忠臣義士」の「国家の難に徇じ」た行動に照らし、曹植個人の政治参加の志を訴えている。

清の朱乾『楽府正義』は、「求自試表」を引用しながら、「白馬篇」について次のよう評している。

此れ幽并の游侠に寓意して、実は自ら況するなり……篇中云う所の軀を捐てて難に赴けば、死を視ること帰するが如しとは、亦子建の素志にして、^{ひろ}泛く述ぶるに非ず。（此寓意於幽并游侠、実自況也……篇中所云捐軀赴難、視死如帰、亦子建素志、非泛述矣。）³⁸

朱乾は、「游侠児」を曹植に引きつけて解釈したのであろう。しかし、前述したように、「白馬篇」の主人公である「游侠児」の含意は、游侠少年の歴史的背景と切り離せまい。そのことを前提にした上で、「白馬篇」に朱乾『楽府正義』が説くような曹植の政治意識や創作意識を窺うこ

*37 同曹植伝、565頁。

*37 同曹植伝、565頁。

*38 『楽府正義』（「京都大学漢籍善本叢書」第8巻、同朋社、1980）巻12、758・759頁。

ともできよう³⁹。

いずれにせよ「白馬篇」は、曹植という個別の人格と史書に記載される游侠少年が、両々相俟って生まれた詩的典型と捉えるべきであろう。

観点を変えるならば、曹植は「白馬篇」において、国難には一身を甘んじて犠牲にすべき対象として国家を意識し表現しているとも言える。「求自試表」のような政治的散文のみならず、「白馬篇」以外の文学テキストにおいても、「殉國家之難」に類する表現に曹植の国家・政治への意識が窺われよう。「白馬篇」の、「軀を捐てて国難に赴けば、死を視ること忽として帰するが如し」という末部で想起されるのは、曹植の「雑詩」に見える次のような句である。

……
遠遊欲何之　遠遊して何にか之かんと欲す
吳国為我仇　吳国は我仇為り

……
閑居非吾志　閑居は吾志に非ず
甘心赴国憂　心に甘んじて国憂に赴かん

「雑詩」其五⁴⁰

……
烈士多悲心　烈士は悲心多く
小人媮自間　小人は媮にして自から間なり
国讎亮不塞　国讎まこと亮つに塞きず
甘心思喪元　心に甘んじて元こうべを喪わんことを思う

「雑詩」其六⁴¹

上記二編は、「我仇」「国讎」に対して「国憂に赴く」「元を喪わんことを思う」と直截に表現している。その制作年に関わらず、「白馬篇」「求自試表」「雑詩」に見られるような曹植の政治や国家に関わる意識・表現には共通点がある。曹植は、建安16年(211)の遠征以後、軍役に従事することはなく、その生涯を通じて戦役の体験やその現実面を描く材料をほとんど持たなかった。また、曹植は『三国志』魏書及び注が記すように、実際には曹操政権や魏朝廷の中樞で

*39 朱乾の説を敷衍して、「求自試表」が上訴された太和2年(228)と「白馬篇」の制作年を性急に関連づけるのは論拠不十分であろう。「白馬篇」の制作年代は推定するに足る十分な確証がない。古直『曹子建詩箋注』(『層冰堂五種』国立編訳館中華叢書編審委員会, 1984)は「此詩蓋為張遼作也」(66頁)と説き、建安『三国志』魏書, 卷1, 武帝紀の建安12年の条に、曹操が張遼を先方に胡族を征討した記事を根拠に挙げる。だが、背景となる張遼の伝記が不十分で、「白馬篇」の制作と結びつけるには根拠薄弱である。伊藤正文『曹植』(岩波書店, 中国詩人選集3, 1958)が、建安年間の作とするのは根拠不明(131頁)。趙幼文『曹植集校注』(人民文学出版社, 1984)は、曹叡時代に鮮卑・匈奴により国家の安全が脅威にさらされていた状況から、游侠少年の尽忠報国が詠われたとし、太和年間の作と推測する(413頁)が、やはり確証に欠ける。

*40 『文選』卷29, 16葉左。

*41 『文選』卷29, 16葉左。

国家経営に参画することもほとんどなかった。したがって自明のことだが、曹植は虚構の文学世界の中で、体験や現実よりは観念や表象の上で、国家・政治に関わる自らの意識を示そうとする。その点において、上に掲げた「白馬篇」「雑詩」「求自試表」も同様に見ることができよう。

曹植には、他の建安詩人に見られるような戦役・従軍の体験を詠む詩が現存していない。曹植の征戦に関する作品には「東征賦」がある。しかし、この作品は序に「建安十九年、王師東に吳寇を征す。余禁兵を典^{つかさど}り、官省を衛る。然るに神武一たび挙げれば、東夷に必らず克たん。振旅の盛んなるを想い見、故に賦一篇を作る…（建安十九年、王師東征吳寇、余典禁兵、衛官省、然神武一挙、東夷必克、想見振旅之盛、故作賦一篇…）」⁴²と述べるように、呉の討伐に遠征する曹操軍を見送りつつ詠まれた賦である。賦の本文は佚文だが、鄴都の守りを託された曹植自身の不安とともに、曹操の六軍が果たすであろう呉における武功を予祝するように詠っている。

「東征賦」は、征役を見送る側の賦であるが、「離思賦」は、その序文に「建安十六年、大軍西に馬超を討つ、太子監国に留まり、植時に従えり。懷恋有るを意い、遂に離思の賦を作る（…建安十六年、大軍西討馬超、太子留監国、植時従焉。意有懷恋、遂作離思之賦…）」⁴³とあり、曹植が、曹操による馬超討伐に従軍するに際し詠んだ賦である。この賦も佚文だが、序文を参照すれば、曹植の従軍体験ではなく、鄴に留まり守る兄曹丕との一時の別れを主題にした作品と考えられる。

他の建安詩人における従軍・戦役の詩を一部のみ例示しよう。

『三国志』魏書、文帝紀注に引かれる、曹丕の「令」に次のような詩が掲載されている。

喪乱悠悠過紀	喪乱悠悠として紀を過ぎ
白骨縦横万里	白骨は万里に縦横たり
哀哀下民靡恃	哀哀たる下民は恃む靡し
吾将佐時整理	吾将に時を佐けて整理め
復子明辟致仕	子に明辟 ^{きみ} を復して致仕せんとす ⁴⁴

『三国志』魏書、文帝紀は、建安25年(220)10月、「漢帝衆望魏に在るを以て…璽綬を奉じて位を禪る(漢帝以衆望在魏…奉璽綬禪位)⁴⁵」と述べている。それに対し、曹丕は一端辞讓するという布令を出す、その中にこの詩が詠まれている。したがって、漢朝への服従を述べる言葉は儀礼にすぎない。ここで注目したいのは、万里まで累々と広がる白骨に象徴される後漢末の戦乱描写である。征戦・戦役を写實的に詠む詩は、蔡琰・王粲・曹操・曹丕等、建安文学にしばしば見られる。後漢末の文学は、戦争の現実を描写することにおいて、逆に戦争の悲惨さを告発するという一面をもっていたと言えよう。

*42 『芸文類聚』(中文出版社、1980)巻59、武部、戦伐、1069頁。

*43 『芸文類聚』巻21、人部5、友悌、390頁。

*44 『三国志』魏書、巻2、文帝紀注引『獻帝伝』所収、65頁。

*45 『三国志』魏書、巻2、文帝紀、62頁。

王粲の「從軍詩」其二は、曹操による呉討伐の戦役に従う決意を示す一方で、『詩経』豳風「東山」の詩句を踏まえ、湧き上がる郷愁や不安を吐露している。

……

拊襟倚舟檣	襟 <small>むね</small> を拊ちて舟檣に倚り
眷眷思鄴城	眷眷として鄴城を思う
哀彼東山人	哀しめり彼の東山の人の
喟然感鶴鳴	喟然として鶴鳴に感じるを
日月不安處	日月安處せず
人誰獲常寧	人誰か常寧を獲ん ⁴⁶
…	…

『詩経』「東山」の本文は、戦役からの帰途につく兵士が語り手となり望郷の念を詠うものである。王粲「從軍詩」は、曹操軍への賛美以上に、行軍にともなう王粲個人の孤独感や憂愁が色濃い。王粲の詩に見られるように戦役を主題としながら行軍の描写に終わらず、望郷や眷恋という個の感情に触れるのが、建安詩の特色でもあった⁴⁷。曹植には、從軍や戦争の体験を詠む詩自体が存在しないとも言えるが、「雑詩」「白馬篇」を見ても、個人の具体的感情は見えにくいように思う。先述したように、「白馬篇」について言えば、曹植個人の政治的な志や叙情を一方的に読み取るよりも、むしろ歴史的背景をもつ游侠少年の実像に創意を加えた一種の詩的典型と捉えることができよう⁴⁸。

曹植は、先に引用した「求自試表」,「雑詩」其五・六,そして「白馬篇」のように、体験ではなく観念や想像において「国家之難」「国憂」「国讎」を言い、言説や表象の上にそれを示している。戦役を題材とするテキストを見ても、曹植の政治や国家に対する意識・表象は建安文学の中で異質であると言ってよい⁴⁹。

「白馬篇」に目を戻せば、游侠の少年が「国難」に「軀を捐てる」と詠う背景には、個別より典型化に向かい、現実・写実よりは理想・虚構、体験よりはファンタジーの世界を創出する曹植の創作意識が働いている。このような、「白馬篇」制作の背後にある曹植の典型化や虚構への志向について、最後に若干触れてみたい。

*46 『文選』巻27, 11葉左～12葉右。『樂府詩集』巻32は、王粲「從軍行」五首として掲載し樂府と見なしている。

*47 曹操の「蒿里行」「苦寒行」、蔡琰「悲憤詩」等々参照。

*48 注7岡村貞雄前掲書(305頁)は、「白馬篇」を踏襲した南朝以後の樂府「少年行」について「作者の直接の抒情とはそれほど深いかかわりを持たない」「北方に活躍する一人の少年の勇姿を生き生きと描くことができれば、少年行はそれで充分だったのである」と論じている。「白馬篇」自身もつ個別を超えた典型化の働きによって、後代の樂府題「少年行」の確立と継承がもたらされたと言えよう。

*49 曹植の政治認識や国家意識に関して言えば、後漢末の文人には漢家を批判、あるいはその滅亡を予言・認識する言説が多く見られる。それに対し、曹植にそのような批判的言説は見いだせない。むしろ、曹植の漢朝に対する愛慕あるいはその表現は、同時代の思潮・言説と大きく隔たっている。このことについての詳細は別稿で論じたい。

四

曹植の「薤露行」⁵⁰を取り上げてみよう。

天地無窮極	天地窮極無く
陰陽転相因	陰陽転じて相い因る
人居一世間	人一世の間に居ること
忽若風吹塵	忽として風の塵を吹くが若し
願得展功勤	願わくば功勤を展ぶるを得て
輸力於明君	力を明君に輸さん
懷此王佐才	此の王佐の才を懷きて
慷慨 ⁵¹ 独不群	慷慨して独り群せず

…… ……

孔氏刪詩書	孔氏は詩書を刪し
王業粲已分	王業粲として已に分らかなり
騁我徑寸翰	我が徑寸の翰を騁せ
流藻垂華芬	藻を流して華芬を垂れん

前半で、曹植は一人高ぶる思いを抱きつつ、明君を補佐する経世の理想を述べている。その一方で詩の結末は、孔子が文筆によって王君の事跡を明らかにしたように、自身も文章をもって名を後代に残したいと締めくくる。経世の理想を言いつつ、最後は文筆への意欲を表明する「薤露行」には、曹植の屈折する思いが窺えよう⁵²。しかし曹植は、事実として政治活動から疎外されていた。だとすれば曹植にとって、「薤露行」が述べるような自己実現の道としての表現活動こそ現実のすべてではなかったのではないだろうか。したがって、曹植の文学における虚構への志向とは作為ではない。曹植にとっては文学表現が現実であり、ある意味では仮想現実であった。だが仮想現実こそが、建安文学において異質な曹植の詩空間を作りあげた。同時にこの仮想現実によって、「白馬篇」は、南朝以後の楽府「少年行」が依拠するような典型たり得たと言えよう。

「白馬篇」は、曹植の詩に描かれる游侠少年⁵³の中でも、とりわけ鮮やかなイメージを残している。西北を目指して飛ぶように疾駆する白馬の「游侠兒」の姿、一旦事あれば国のために一身を犠牲にする少年像は、典型として長く詩人の記憶に残り継承されることになった。さらに、

*50 『芸文類聚』巻41、楽部1、論楽、741頁。

*51 『芸文類聚』は、愷に作る。『楽府詩集』巻27により改める。

*52 この作品の主意を、『春秋左伝』襄公二十四年に説かれる「三不朽」に鑑み、経世の理想が遂げられない曹植が、「立言」の道を志したものとする解釈が多い。趙幼文『曹植集校注』（434頁）もそのような解釈に連なる見方をしている。

*53 注1前掲書参照。

後代の侠客小説や游侠を題材とした戯曲等様々な文学ジャンルへの展開まで広く見わたせば、それらの源流の一つに「白馬篇」を位置づけることもまた可能であろう⁵⁴。曹植による「游侠児」の創造は、中国文学における新たな詩的形象の誕生でもあった。

「游侠児」の原型には、史書に記されるように、国家の戦役や勢力集団の闘争に駆り出される無数の「少年」の姿がある。さらに「白馬篇」において、国家に進んで身を捨てる「游侠児」像の創り出された背景には、曹植の国家に関わる特徴的な観念・意識が窺いうると思われる。この点については、別稿を用意し考察したい。

*54 注11 前掲書は、様々な文学ジャンルにおける游侠を考察する。また、張衡「西京賦」は文学テキストに游侠が見える早い例であるが、その描写は些末であると指摘している。曹植「白馬篇」については、游侠の大いなる賛歌と評するとともに、親への孝より英雄的な行動に価値を見る点に大きな特徴があると説く。51～53頁。曹植以前に游侠を主題とした作品が存在しないことを考えれば、「白馬篇」の原初的な位置に着目すべきであろう。

曹植《白馬篇》考——“游俠兒”的誕生一

福 山 泰 男

後漢末三國時期的詩人曹植的《白馬篇》，是塑造了“揚聲沙漠垂”的“游俠兒”形象的樂府作品。《白馬篇》不但歌頌了“游俠兒”的英猛身姿，而且把對“棄身鋒刃端，性命安可懷……捐軀赴國難，視死忽如歸”的英勇赴敵的悲壯描述作為全詩的結束。歷代文本給《白馬篇》中所謳歌的為國獻身的“游俠兒”形象帶來了什麼樣的影響呢？

“游俠兒”一詞雖然不叫“少年”，但指游俠的少年。本論文將置《白馬篇》的游俠少年於歷史背景中，并在此基礎上對曹植的新“游俠兒”形象加以探討。

《白馬篇》在曹植所描寫的游俠少年的詩中，留下了特別鮮明的形象。向西北飛馳的白馬“游俠兒”的身影，是一旦邊關告急，就為國獻身的少年形象。作為典型一直留在詩人的記憶深處。并且，如從宏觀的角度來看，《白馬篇》對後世以俠客小說和游俠為題材的戲曲等多種文學形式的展開，應該是一個起源吧。由於曹植對“游俠兒”的塑造，使後世的中國文學受到了較大的影響，從而創造出富有詩意的藝術形象。